

# 宮城教育大学教職大学院「学校における実習」の 意義に関する一考察

—「学校課題探究実習 I（基礎実践）」に対する  
1 年次ストレートマスターの振り返りの記述内容を通して—

\* 猪股 亮文

A Study of the Significance of Teaching Practice  
at Graduate School of Miyagi University of Education

INOMATA Akifumi

## 要 旨

宮城教育大学教職大学院では、2021（令和3）年度から、教職としてのより高度な専門性を身に付け、教育の今日的課題の解決を図る人材養成を強化する目的で、これまでの大学院（修士課程、教職大学院）を改組・再編し、新しい大学院（教職大学院）を立ち上げた。これまでの「学校における実践研究」は、「学校における実習」として再編された。

本稿は、新しい宮城教育大学教職大学院が立ち上がり、新たに「学校における実習」が実施されるという節目を迎えたことも踏まえ、大学院学生の視点から、「学校における実習」の意義を論考し、教職大学院で行う実習の意義に関する議論に一石を投じることを試みようとしたものである。

**Key words**：宮城教育大学教職大学院「学校における実習」、教職への就職志向、自律的な学びや研鑽、  
学び続ける教師

## はじめに

### 1 「令和の日本型学校教育」を担う教師を養成する 宮城教育大学教職大学院において期待される「学 校における実習」

中央教育審議会は、2021（令和3）年1月26日の答申「「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」(以下、「令和3年答申」という)において、学校が学習指導に加え、生徒指導の面でも主要な役割を担い、様々な場面を通じて、子供たちの状況を総合的に把握し教師が指導を行い、子供た

ちの知・徳・体を一体で育む学校教育の在り方を「日本型学校教育」という言葉で表した(中央教育審議会、2021a)。また、その成果として、全ての子供たちに一定水準の教育を保障する平等性や、全人格的な陶冶・社会性の涵養などを挙げている。

その上で、令和3年答申において、今般の新型コロナウイルス感染症の感染拡大をはじめとする社会の急激な変化の中で再認識された学校の役割や課題を踏まえ、ツールとしてのICTを基盤としつつ、「日本型学校教育」を発展させ、2020年代を通じて実現を目指す学校教育を「令和の日本型学校教育」と名付けた。そして、目指すべき「令和の日本型学校教育」の姿を「全

\* 宮城教育大学教職大学院

ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」とした。また、同答申では、「令和の日本型学校教育」を通じて、各学校段階において目指す子供の学びの姿について以下のように挙げている。まず、幼児教育では、幼児が身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で達成感を味わいながら健やかに育つ姿。次に、義務教育では、児童生徒一人一人がICTを活用することなどにより、基礎的・基本的な知識・技能や言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等を培う姿や、一人一人の興味・関心等に応じ、その意欲を高めやりたいことを深める姿。加えて、多様な他者と協働し主体的に課題を解決しようとする探究的な学びの姿や、様々な体験活動、地域の資源を活用した教育活動を通じ、身近な地域の魅力や課題を知り、地域の構成員の一人としての意識や主権者としての意識を育む姿。さらに、高等学校教育では、社会の形成に主体的に参画するために必要な資質・能力を培う姿。生徒が自立した学習者として、高い学習意欲をもって、探究的な学びや、STEAM教育などの実社会での課題解決に生かしていくための教科等横断的な学びに向かう姿、である。

子供のこうした姿を実現するために、「令和の日本型学校教育」を担う教職員の姿はどのようなものであろうか。この点について、令和3年答申では、教職生涯を通じて探究心を持ち自律的かつ継続的に新しい知識・技能を学び続け、子供一人一人の学びを最大限に引き出す能力や、子供の主体的な学びを支援する伴走者としての能力、チームの一員として組織的・協働的に取り組む力などを備え、創造的で魅力ある教職の仕事に志高く誇りを持って取り組む姿として示されている。また、教職員のこうした姿が、教職の魅力を適切に認識することを促し、教職を志す学生を増加させるとともに、教師としての就職を促進することにもつながるとしている。

これらの点に関連して、2021（令和3）年3月12日に文部科学大臣から諮問された「『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について」（以下、「諮問」という）の審議事項の第四番目には、教職大学院の在り方に関して、教師の養成の高度化に取り組むことや、教職を志す学生を引きつけ教師としての就職を促すこと、現職教員の自律的な学びや研鑽を支えることの必要性が挙げられている（中央

教育審議会，2021b)。このことから、これからの教職大学院においては、「（理論および実践の）高度化」「教職志望の高まりの支援」「自律的な学び」のために教育課程を精選し、改善を重ねながら運用していく必要があると考えられる。

この諮問と同時期にあたる2021（令和3）年度、宮城教育大学は、それまでの高度教職実践専攻（教職大学院）と修士課程を統合して、新たな高度教職実践専攻（教職大学院）の教育課程を新たに立ち上げた。宮城教育大学教職大学院は大学院学生が大学での理論の学修と、学校教育現場での実践の学修とを往還することを通じて、教師の専門性の深化を実現できるように教育課程を編成し、大学院学生が自己の中で「理論と実践の融合」の実現（「専門性の深化」）を図り、最終的に高度専門職業人としての教師の専門性の高度化を実現することを目指している。新しい教育課程で実施される実習科目群「学校における実習」において、大学院学生は、「把握」⇒「適応」⇒「分析」⇒「開発」の一貫した学習過程により、理論と実践の往還・融合を体験し、理論の深化と実践の高度化の実現を図ることとされている。中でもストレートマスターは実際の教育現場で教職の魅力にも触れながら、教育実践と子供理解を深化させつつ、「学び続ける教師」の基盤を確立することを目指している。現職教員学生は、授業実践を自ら立案・実施し、実践での成果と課題を検証・開発する力を高めるとともに、学校経営も視野に入れ、教育課程編成、授業実践への助言、さらには、校内研修体制の組織化・運用の支援ができる資質・能力などを培うなど、「学び続ける教師」として、専門性の深化を目指している。

「学校における実習」は、先に述べた諮問において挙げられた教職大学院に求められる姿を実現することができるであろうか。「学校における実習」では、1年次大学院学生が理論の深化と実践の高度化の実現を図り、自律的に学び、研鑽に取り組むとともに、ストレートマスターにとっては教職の魅力を感じし教職への就職志向が高まる取組であることが期待される。そこで、「学校課題探究実習Ⅰ（基礎実践）」における1年次ストレートマスターの振り返りの記述内容から、そうした意義がうかがえる具体的事例について読み取ることを試みた。

## 2 宮城教育大学教職大学院の課程改革と「学校における実習」

宮城教育大学は、教職としてのより高度な専門性を身に付け、教育の今日的課題の解決を図る人材養成を強化する目的から、これまでの大学院（修士課程、教職大学院）を改組・再編し、新しい大学院（教職大学院）を立ち上げた。新課程では、大学院学生が自己の中で理論的な学修と実践的な学修の成果の融合を実現させていくことを「専門性の深化(高度化)」ととらえ、実践系科目の学修を基盤としながら理論系科目を学修し、その過程において「理論と実践の往還」を繰り返しながら「把握」、「適応」、「分析」、「開発」の段階的

学修を進めることとしている。

2020（令和2）年度までの旧教育課程では、実践系科目「学校における実践研究（基礎実践研究Ⅰ，基礎実践研究Ⅱ，応用実践研究Ⅰ，応用実践研究Ⅱ，応用実践研究Ⅲ，各10日間）」が実施されてきた。これにかえて、2021（令和3）年度からは、実践系科目「学校における実習」は、「学校課題探究実習Ⅰ（10日間）」「学校課題探究実習Ⅱ（10日間）」「学校課題解決学習（10日間）」「学校課題解決実習（10日間）」「臨床教育開発実習（20日間）」として実施されている。

「学校における実習」は、理論系の諸授業科目との連動を前提とし、図1に示すとおり、「把握」⇒「適応」



図1 宮城教育大学教職大学院 学校における実習

出典：宮城教育大学教職大学院案内－理論と実践の融合を実現－2022

⇒「分析」⇒「開発」の一貫した学習過程により、理論の深化と実践の高度化の実現を目指している。

### 3 1年次「学校における実習」のねらい

「学校における実習」において、1年次ストレートマスターは、毎週水曜日を原則として、実習校において、「学校における実習」として、「学校課題探究実習Ⅰ（基礎実践）（5月～6月、10日間）」、「学校課題探究実習Ⅱ（基礎実践）（7月～9月、10日間）」、「学校課題解決実習（臨床実践）（10月～1月、10日間）」を行う。現職教員学生は、審査により「学校課題探究実習Ⅰ・Ⅱ」の履修を免除され、「学校課題解決実習」のみを行う。1年次の実習に抛り、ストレートマスターは、教育実践と子供理解を深化させつつ、「学び続ける教師」の基盤を確立することを目指す。現職教員学生は、実践を立案・実施し、成果と課題を検証・開発する力や、学校経営まで視野に入れながら、教育課程編成、授業実践への助言、さらには、校内研修体制の組織化・運用の支援ができる資質・能力を培うことを目指す（表1）。

2020（令和2）年度までの旧教育課程では、5つの実習のうち2科目（1年次「基礎実践研究Ⅰ」と2年次「応用実践研究Ⅲ」）が附属学校で、それ以外の3科目はその他の様々な学校で実施され、学生は2年間の間にいくつもの学校で実習を行っていた。また、4つの実習（1年次「応用実践研究Ⅰ」以外）は短期間集中で実施されていた。一方、2021（令和3）年度実施の新教育課程「学校における実習」では、「理論と実践の往還」を実現し、学生の研究の専門性をより高度化していくための工夫を行っている。まず、ストレートマスターについては、基本的に実習校を固定化し、1年間（可能であれば2年間）、特定の学校で実習を行う構造とすることにより、眼前の課題について学び続けることを可能とし、より現場に即した研究の深化を可能にした。

実習校が固定化されることから、その選定に際しては、実習部会が年度当初に大学院学生と面談を行い、大学院学生 の意思を確認しながら、本人の研究テーマを考慮して可能な限り研究内容に関連のある教育活動を積極的に展開している学校に担当した。研究テーマに即した意欲ある学校への配当は、学生本人の学びをより充実させるとともに、実習校側としても実習生の

活動を支援しやすく、これによって学生と実習校との関係が良好なものになることが期待される。その結果として、テーマに即した実習校への配当は専門性の高度化につながることに加え、教職への就職志向を高めることにもつながる可能性がある。

また、実習は原則として集中期間で実施せず、期間中定期的に行うこととした。特に、1年次ストレートマスターは、基本的には週に1回、実習を行い、また大学においては実習日ごとに提出する記録をもとに、省察を繰り返し実施している。このことにより、「理論と実践の往還」が教育課程においても具体化し、学生の自律的な学びと専門性の高度化を大学教員が日常的に支援する体制が実現した。

実習内容も、長期的なスパンを前提として再編された。ストレートマスターが最初に履修する「学校課題探究実習Ⅰ（基礎実践）」は、自身の研究テーマをめぐる課題や子供の実態の把握、テーマの具現化や実践計画のための「観察」を主たるねらいとしている。ストレートマスターは現場経験が少ないことから、研究テーマや検証の視点が子供の実態やニーズと乖離しがちである。そこで、「観察」の手法を学び、観察した事実を省察し、自身の研究を見直す期間を設けることで、研究テーマがより高度化し、また、学生本人が学び続けることの意義と、そのための基礎的な技法を身に付ける機会が得られるものと考えた。

このような特徴をもつ「学校における実習」は、果たして諮問において求められた「教職への就職を促すこと」「自律的な学びや研鑽を支えること」にどの程度近づくことができるであろうか。本稿では、現時点で既に終了している「学校課題探究実習Ⅰ（基礎実践）」のみを対象として、その意義や課題を論考する。

## 方法

「学校課題探究実習Ⅰ（基礎実践）」（5月～6月：10日間）を終了した1年次ストレートマスター36名が、実習前後を比較し、研究に対する考え方や児童生徒観・指導観の変化、学校に関する新たな気付きや自身に関する新たな気付きなどについてまとめた振り返りの記述内容の中心的内容に注目した。その内容は、子供の心身の発達の過程や特徴、組織の中での人間関係、危機管理、学習評価、ICT活用、教師の自律的

表1 2021(令和3)年度1年次大学院学生対象の「学校における実習」のねらいと目標

出典：宮城教育大学教職大学院「令和3年度実習のしおり」「令和3年度履修のしおり」(一部改変)

<p>ねらい</p>	<p><b>実習を通して培う四つの資質・能力</b></p> <p>○状況分析力：テーマに即したデータ収集を行うとともに、問題や事象に関して理論との往還により問題の解決の方向を見通すことができる。</p> <p>○企画力：収集したデータをもとに、研究課題の解決の方向を見通し具体的な問題解決策を立案することができる。</p> <p>○実行力：研究課題の解決の方向を見通し、具体的な問題解決策を実証的に試みることができる。</p> <p>○探究力：テーマに関わる問題解決策を客観的に評価し内省的に思考するなどして新たな探究を展開できる。</p>
<p>実習(1年次)の目標</p>	<p><b>実態把握</b>「学校課題探究実習Ⅰ」5月～6月, 10日間(基礎実践)</p> <p>(1)状況分析力：理論に基づく教育現場の観察を通じて、自らの実践研究テーマに即した教育課題を把握することができる。</p> <p>①研究的視点から校長や教員と対話し、理解したことを通じて教育課題を明確にできる。</p> <p>②研究的視点から、授業や、授業以外の活動において児童生徒を観察・分析し、教育課題を明確にできる。</p> <p>③研究的視点から、学校現場の活動を観察・分析し、教育課題を明確にできる。</p> <p>(2)企画力：把握した教育課題を解決するための検討を行い、実証の方向性と成果の見通しを持つことができる。</p> <p>④理論と実践の架橋・往還により教育課題の解決に向けた実践の方法を検討することができる。</p> <p>⑤研究的視点から教育課題解決に取り組む実践の方法と成果の見通しを示すことができる。</p> <hr/> <p><b>適 応</b>「学校課題探究実習Ⅱ」7月～9月, 10日間(基礎実践)</p> <p>(1)企画力：実践研究テーマに即した教育課題について、具体的な解決策を立案し、その実践を計画することができる。</p> <p>①他者の意見や助言に耳を傾け、児童生徒から学ぼうとする意識を持って、教育課題の解決策の実証を具体的に計画することができる。</p> <p>(2)実践力：適切な検証の見通しを持って計画的に解決策の実証を試みることができる。</p> <p>②自ら考える教育課題の解決策を実証する目的で、実践を行い、成果を客観的に分析するために必要なデータを適切な方法で集めることができる。</p> <p>(3)探究力：実践を客観的に評価し、内省的に思考するなどして、新たな探究の方向性を見出すことができる。</p> <p>③自らの実践を客観的に省察し、その成果と課題を分析・解釈ができる。</p> <p>④自らの実践を客観的に省察し、児童生徒の変容を分析・解釈できる。</p> <p>⑤実証の方法を再考し、改善することにより、新たな実践に取り組むことができる。</p> <hr/> <p><b>分 析</b>「学校課題解決学習」10月～1月, 10日間(臨床実践)</p> <p>(1)探究力：実践研究テーマに関わる教育課題のこれまでの解決策の成果と課題を客観的に評価し、内省的に思考するなどして、新たな探究の方向性を見出すことができる。</p> <p>①教育課題に対する自らの取り組みの改善を行い、その結果を客観的に省察し、成果や課題を総合的に分析・解釈できる。</p> <p>②自らの考察をもとに教員らと対話し、新たな探究の方向性を見出すことができる。</p> <p>③教員らとの協同的な学びに取り組むことにより、自らの研究力を深めることができる。</p> <p>④教育課題の解決に向けて新たな視点を得たうえで、実践に向けて必要な研究方法と成果の見通しを明確にすることができる。</p>

な学びや研鑽, 教職への就職志向に関するものであり, 否定的な内容は見られなかった。また, 実習の進め方について否定的な内容も見られなかった。

なお, 本稿では, 諮問において求められた「教職への就職を促すこと」「自律的な学びや研鑽を支えること」にどの程度近付くことができるかを主として検討することから, 特に, 「教師の自律的な学びや研鑽」「教職への就職志向」に関する記述内容に着目した。

## 結果

### (1) 学び続ける教師の基盤となる自律的な学びや研鑽をめぐる記述

学生が研究テーマなどを見つめ直すなど, 研究を深めていく様子が, いくつかの記述から浮かび上がってきた。グループ学習の効果について研究する学生 A は, 「研究テーマについて, 自分は何を明らかにし, 何を得たいのか, 再度向き合うこととなった」「その研究が子供に還元されるものとなるか。実際の子供の様子を見ながら考えが変わった」と述べており, 研究を深めるための授業のアプローチを新たに模索している。学校課題探究実習 I を研究のための実習と明確に認識していた学生 B は, 「授業の見方のバリエーションが増えた」「自分の研究課題が現場の小学校とかけ離れたことではなく, 必要になるものだという実感をもつことができた」「実践ももちろん大切だが, 文献研究や理論的な知識の習得を丁寧に行いたい」と述べるなど, 研究課題の解決に向けた確かな方向性を見出しつつある。学生 C は, 「新たな知見が生まれ, 正しく効果的なものが明らかにされていく中で, 従来の慣習や当たり前としてなされてきた行為等を考え直すことが必要である」「授業で行われること一つ一つに, その目的や意義を考えることが教育的な諸課題を解決するきっかけとなる」と述べており, 自身の取組の目的や意義を再確認し問題解決の見通しをもとうとしている。学生 D は, 「先生の指導の様子や手立てなどにばかり着目するのではなく, 生徒の授業中のつぶやきや反応, 授業中に生徒が何を考え, どのような思考で友達と話し合い, 活動中のどこで躓いているかに注目, 観察したい」と述べるなど, 学び手である生徒側から研究を捉え直そうとしている。学生 F は, 「手順・基礎研究・調査を通してそれを解決していくかが重要で

あり, それが不明確なままでは長い目で計画的な研究はできない」「研究に対して多角的な視点を持ち様々なアプローチで研究内容について考えていくことも重要であり, 研究というものが決して一本道ではない」「着実に研究を行っていくためにも綿密な研究計画が必要である」と述べており, 研究の進め方を問い直し, 研究を進める上で大切な考え方があることに気付いている。

また, 学生が授業観察を通して, 学生の指導観が変化していく様子も, 学生 G の記述から浮かび上がってきた。学生 G は, 「生徒たちがなるべく自分や生徒同士で話して課題達成まで進める生徒主体の授業の方がよい」「一方的な知識伝達の授業から, 教師が授業の中でファシリテーターやアドバイザーといった生徒の活動を支えられる役割を意識する」と述べており, 学習者中心の授業を創造する教師の役割についての認識を深めている。

さらに, 先生方の授業のやり方とそのねらいに感銘を受けた学生 H は, 「先生方は授業のやり方が似ていても, ねらいやそれを達成するための方法を独自に持っており, 試行錯誤の日々を送っていた」「今回の実習を経て, 『教員は学び続けること』がよく分かった」と述べており, 教員としての自己研鑽の必要性を認識している。

### (2) 教職への就職志向をめぐる記述

学生が教職への就職志向を高めていく様子が, 学生 I, 学生 J, 学生 K の記述から浮かび上がってきた。

小学校で実習する学生 I の了解を得て, 本人が記述したままを四角囲み部分に掲載した。

教師を志す思いが強くなったことです。私が教師を志したのは、周囲の人より少し遅く、学部4年生の12月でした。小学校の先生になりたいと思いつつも、授業が自分にできるのか、責任をもって子どもたちを守ることができるのか、不安があり、教職大学院に入学してからもずっとこのような思いを持っていました。しかし、学校課題探究実習Ⅰが始まり、実習先の小学校の子どもたちと関わったり、授業観察をしたり、先生方のお話を聞く中で、「教師の魅力」を実感したり、「自分に足りない知識や技能」について自覚するようになり、将来出会う子どもたちのためにもっと勉強したい、勉強しなければならないという思いの方が強くなりました。

学生Ⅰは、実習を通じて、「授業が自分にできるのか、責任をもって子どもたちを守ることができるのか」といった不安よりも、「教師を志す思いが強くなった」「将来出会う子どもたちのためにもっと勉強したい、勉強しなければならないという思いの方が強くなった」と述べている。学生Ⅰの認識の変化について、本人から直接、その経緯を尋ねた。「実習校の校長先生と話す中で、校長先生はじめ先生方が心から子供たちを大切にしていることを実感した。子供たちを大切にす校長先生や先生方との出会いと、子供たちを大切にすることで子供に救われることもあるという校長先生の言葉が心に残っている」「実習校へ訪問する度、校長先生と話したり、先生方の授業を観察したりすることを通して、教師の魅力は子供と一緒に成長を喜び合えることに気づき、子供と一緒に成長を喜び合える先生になりたいと思うようになった」と述べており、校長との対話や授業観察の機会を重ねることで、教師の魅力に気づき、その気づきが教職への就職志向の高まりを促している。また、「子供たちは先生が大好きなら、どこまででも付いてきてくれるという校長先生の言葉が印象に残っている。自分の研究や勉強も「子供たちのため」であると認識、実感するようになった」「自分にとって「なりたい教師」のイメージも少しずつもてるようになった。今は、潜在的カリキュラムの重要性を踏まえ、子供への接し方をもっと学びたいと考えている」と述べており、校長との対話を重ねることで、自分にとっての自己研鑽の目的や必要性について

認識を深めている。

学生Ⅱは、「学級活動や授業観察で、ただひたすらに目の前の課題に取り掛かる様子を見て、こういった生徒の育成に携わりたいという思いが実習開始時に比べて強くなりました」と述べており、生徒たちの姿の観察を通じて中学生を育てる教職への就職志向の高まりが見られる。また、学生Ⅲは、「実習校の先生方が、生徒一人一人と対話をしながら、それぞれの良さを生かした指導を行っていること、誰一人見逃さない先生の姿を見て、私もそういう教師になりたい、そういう授業を作りたいと思うようになった」と述べており、生徒一人一人の良さを生かした指導を行う先生の姿の観察を通じて教職への就職志向の高まりが見られる。

## 結び

本稿では、これまでに、『宮城教育大学紀要』や『宮城教育大学教職大学院認証評価 自己評価書』などの諸資料において、教職大学院で行う実習の意義について大学院学生の視点から総括した資料がなかったことや、新しい宮城教育大学教職大学院が立ち上がり、新たに「学校における実習」が実施されるという節目を迎えたことも踏まえ、「学校における実習」に着目し、大学院学生の視点から、その意義について考えてみた。

2021（令和3）年度から実施している宮城教育大学教職大学院における「学校における実習」は、現在、「学校課題探究実習Ⅱ（基礎実践）」、「学校課題解決実習（臨床実践）」が進行中であることから、本稿は、現時点で既に終了している「学校課題探究実習Ⅰ（基礎実践）」を学修した宮城教育大学教職大学院1年次ストレートマスターのみを対象とした。「学校課題実習Ⅰ（基礎実践）」（5月～6月：10日間）を終了した1年次ストレートマスター36名の振り返りの記述内容の中心的な内容に注目したところ、その内容は、子供の心身の発達の過程や特徴、組織の中での人間関係、危機管理、学習評価、ICT活用、教師の自律的な学びや研鑽、教職への就職志向に関するものであった。宮城教育大学教職大学院「学校における実習」の意義の検討に当たっては、特に、「教師の自律的な学びや研鑽」、「教職への就職志向」を中心的な内容とした記述を読み取ることにした。その結果、学生が研究テーマを見直すなど研究を深めていく様子や、自己研鑽の

必要性の認識を深めていく様子，加えて，教職への就職志向を高めていく様子などが，いくつかの記述から浮かび上がってきた。

宮城教育大学教職大学院「学校における実習」の意義に関する研究はまだ緒についたばかりである。今後，稿を改めて引き続き検討する課題が残されている。まず，1年次ストレートマスターが「学校課題探究実習Ⅰ（基礎実践）」、「学校課題探究実習Ⅱ（基礎実践）」、「学校課題解決実習（臨床実践）」の三期合計30日間を終了した後に，改めて1年次ストレートマスターを対象とした，「学校における実習」の意義について検討すること。また，2年次で取り組む「臨床教育開発実習」についても，その意義について検討すること。加えて，1年次現職教員学生を対象に実施される「学校課題解決実習（臨床実践）」と，2年次で取り組む「臨床教育開発実習」の意義について検討すること。これらについて引き続き検討することを今後の課題とし，稿を閉じることとする。

## 引用文献

- 中央教育審議会（2021a）「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（答申）．2021年1月26日．
- 中央教育審議会（2021b）令和の日本型学校教育を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について（諮問）．2021年3月12日．
- 宮城教育大学（2021）履修のしおり 大学院教育学研究科 専門職学位課程（高度教職実践専攻）令和3年度（2021年度）．宮城教育大学．
- 宮城教育大学（2021）実習のしおり 大学院教育学研究科 専門職学位課程 高度教職実践専攻（教職大学院）令和3年度（2021年度）．宮城教育大学．
- 宮城教育大学（2022）宮城教育大学教職大学院案内 大学院教育学研究科／専門職学位課程／高度教職実践専攻－理論と実践の融合を実現－2022．宮城教育大学．

## 参考文献

- 宮城教育大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻（2011）教職大学院認証評価 自己評価書．
- 宮城教育大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻（2016）教職大学院認証評価 自己評価書．